

特集 皆既日食報告 人生観を変える異世界体験

福江 純 (大阪教育大学)

今世紀最大のイベント(!?)、天体現象としては、おそらく冥王星以来の大騒ぎになった皆既日食 2009@日本近海である。日本の大部分では部分日食だが、トカラ列島から小笠原諸島にかけて、日本の南海上を皆既日食帯が通過した。今回、初めて皆既日食観測ツアーに参加したので、皆既日食クルーズを簡単に報告するとともに、いくつかの実験についても紹介したい。

1. “豪華”客船クルーズに反応

“福江さんも一緒に乗りませんか？”

“ハイッ！ 行きます！”

2年前の夏に、西はりま天文台の黒田武彦公園長から、今回の2009年の皆既日食ツアーに誘われた。いままで皆既日食を見たくなかったわけじゃないが、曇るリスクを冒して現地まで行くほどの根性と勇気はなかった。

しかし、今回は少し話が違う。何しろ黒田さんが音頭を取って豪華客船を仕立て、皆既日食帯の通る小笠原近海までクルーズし、メインイベントが皆既日食というツアーだ。この“豪華客船クルーズ”に反応してしまったのである(笑)。

チャンスがあれば、クルーズの、いやいや、皆既日食の素晴らしさを是非多くの人に実体験して欲しいと思い、キーボードを叩くことにした。直前に紀行文を依頼された『数学セミナー』誌では速報的な報告(2ページ)を書いたので、『天文月報』誌には観測がらみの事実経過および赤い水平線に関する考察などやや研究よりの話(6ページになった)を、そして『天文教育』誌にはクルーズの紹介やピンホール像の実験など読み物的で教育より

の内容を書くことにしたい。整理するのに2週間かかった詳細で膨大な(笑)報告と精選したデータやアニメーションなどは、ホームページ[1]を参照していただきたい。

2. 2年間の事前準備

黒田さんに誘われたときから、2年間にわたるNOT団(=日食を大いに楽しむ団;SOS団=世界を大いに盛り上げる涼宮ハルヒの団の関連組織)と黒田本舗の活動が開始された(図1)。



図1 2008年8月に撮影した黒田さんの写真と、黒田本舗企画部長兼専属デザイナーの「かず茶」さんが描き起こした似顔絵

今回の皆既日食では、自分とツアーを盛り上げるために、事前に黒田さんの許可も取り(正確には、“ツアーのときにグッズを売ってもいいですか？”と聞いたら“どうぞ何でもやってください”と言ってもらえたので何でもやった;笑)、『黒田本舗』をツアー中の6日間期間限定で開店営業することにした。ど

んなグッズがいいかとか、ぼちぼちと検討しているうちに、あっと言う間に1年半が経ってしまい、2009年の4月になってから、いよいよ本格的な開店準備に入った。

まず記念グッズについては、黒田本舗専属デザイナー「かず茶」さんが描きためた絵をもとに、絵はがきやメモ帳やクリアファイルやTシャツなどの検討をはじめた。絵はがきについては、4月早々に行きつけの写真屋さんで見積もりを取ってもらい、そこそこの値段で印刷できそうなことがわかる(図2)。

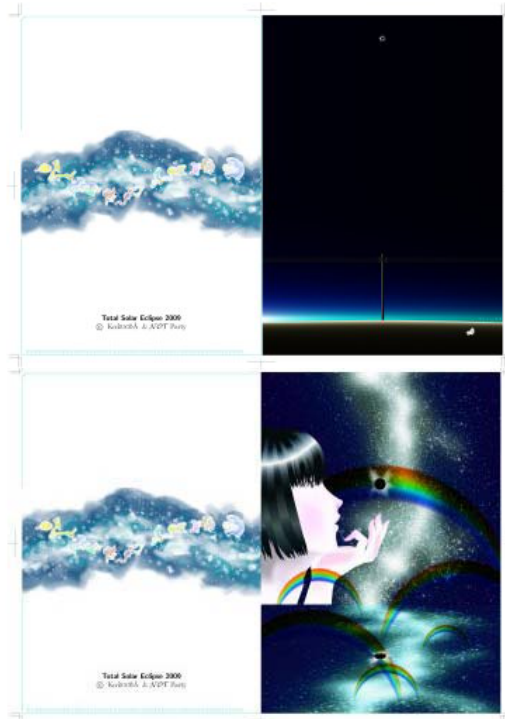


図2 絵はがきの図柄

いろいろなデザインから10種類を厳選した。セットAはリアル黒田を含むシリーズで、セットBはデフォルメ黒田を含むシリーズ。

しかし、クリアファイルその他は、人に尋ねたりネットで調べたりするものの、少部数だとどこも割高高額になり、ポケマネではさすがにしんどい。もはや無理かなと諦めかけた6月下旬になって、ようやくネットで、少部数のクリアファイルでもポケマネで許容できる価格で印刷してくれる業者を見つけ、大急ぎで注文し、ぎりぎり間に合った(図3)。

また同じころ、Tシャツの方も安く印刷してくれる業者が新聞広告で見つかり、こちらも大急ぎで注文して、ぎりぎり間に合った(図4)。メモ帳の方は、財布の限界と、おそらく物量的な限界(持参不可能だろう)から、残念ながら見送ることにした。



Total Solar Eclipse 2009
© KazuchÅ & NOT Party

図3 クリアファイルのデザイン

表面は2種類を作成した。タイプAは2006年のトルコ日食のイメージで、タイプBは海上で観測する今回のイメージ。裏面は共通のデザインで、ロゴはわざわざ論文作成用のLaTeXというソフトで作成(笑)。

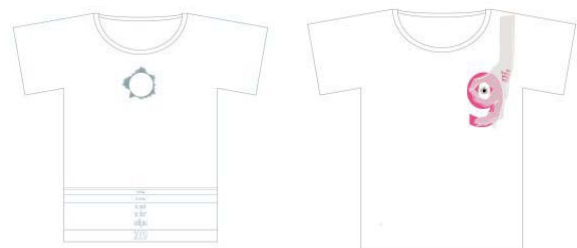


図4 Tシャツのデザイン

やはり2種類を作成した。どちらも日食時以外にも着られるシンプルなデザインとしてある。

また、これらの販売グッズの製作と並行して、特典グッズを検討し、5月の連休をつぶして「太陽太陰図鑑」というものを作成した。さらに大特典グッズとしては、「ステキな本3

冊セット」を用意することにした。後者については、もともとは、クルーズに参加するはずの、海部宣男さんとか森本雅樹おちさんら著名人の本を3冊セットにしたら、盛り上がって面白いだろうなあと考えて、“ステキな”本としたけど、さすがにそこまで根回しをする余裕はどこにもなくて、自分の本でごまかすことにする(笑)。それって“ステキな”本なのかっ！？て突っ込まれると痛いけど。

最終的には、黒田本舗の日食記念グッズとして、

- ・絵はがき5種セットA 100セット
- ・絵はがき5種セットB 100セット
- ・クリアファイルA 100枚
- ・クリアファイルB 50枚
- ・TシャツA 10枚
- ・TシャツB 10枚
- ・お買い上げ特典A 太陽太陰図鑑 40部限定
- ・お買い上げ特典B ステキは本3冊セット 5部限定

を用意した。その他に手作りで社員名刺やタスキも作り、黒田本舗の開店準備が整ったのが出立の数日前である(図5)。



図5 黒田本舗のグッズ各種と特典などこれだけの物品をもっていけるだろうか？

また、もともとは、完全にバカンスのつもりだったけど、本業(?)がらみで、結局、できるだけ皆既日食の様子を記録することにし、そちら関係の機材もきちんと揃えることにした。難儀な性である。で、最終的には、仕事用機器+日食観測用機材として、

- ・ノートパソコンや電源ケーブルなどアクセサリ一式
- ・デジカメや電源ケーブルなどアクセサリ一式
- ・デジタルビデオ、電源ケーブル、ワイドコンバータレンズ、三脚、その他アクセサリ一式
- ・DSと電源ケーブルなど
- ・そしてもちろん日食メガネ各種などとなった(図6)。



図6 パソコンや撮影機材やDSなどこれだけの物品をもっていけるだろうか？

3. 皆既日食観測ツアー

さて、今回参加した『2009年 皆既日食クルーズ』は、豪華客船ふじ丸——関係者間では通称「黒田丸」——で、7月20日(月)に姫路港を出港し、22日(水)には皆既日食帯中心線の最大食近傍で皆既日食を観測して、25日(土)に帰港する、5泊6日のロングクルーズである。皆既日食はもちろんだが、こんな客船クルーズも初体験だ。

もともと出不精で旅行は苦手なタイプ（典型的なインドア派）で、飛行機にはじめて乗ったのも30代半ばになってからぐらいだが、それでも昔からなぜか洋上クルーズには憧れがあった。

乗船してパンフレットをもらってからでは時間が惜しいので、事前にネットで船内マップを手に入れ、どこでどう楽しむかをイメージトレーニングしておく。パーカーやスラックスや帽子なども新調し、もてる用のクルーズ装いもばっちり（妄想）である（これはやはり妄想に終わった；笑）。

3.1 7月20日（火）クルーズ第1日目

届いた日程表をみて、意外ではなかったものの、いわゆる観光旅行とは違って、豪華客船クルーズというものは、朝から晩まで食べまくる旅行のようだ。初日は午後からだから目立たないが、2日目からは壮絶である。しかし、ネットでは、ふじ丸の料理はとても美味らしい。量は食べられないだけに、質が楽しみだ。

さて、当日の朝は慌ただしい中、大荷物を抱えて何とか姫路まで辿り着いた。早めの昼食を取ってタクシーで姫路港の旅客船ターミナルへ向う（図7）。



図7 旅客船ターミナルに停泊する、ふじ丸

おおっ！ ふじ丸、でかいぞ、人、多い！！
長い列を並んで何とか受付を済ませて乗船し、やっと部屋へ落ち着いた。思いの外に設えのいい部屋である。さすがに豪華客船だ。結構へとへとだが、少し休んで、まずは船内探検に出かける。

そうこうするうちに、出港セレモニーが始まり、乗客の多くは4階で船を取り巻くプロムナードデッキへ鈴なりになった。埠頭では海上保安庁（？）の吹奏楽や和太鼓の演奏があったり、乗客にはシャンパンやジュースなどが振舞われたりする。そしてふじ丸のクルーが乗客にテーブルを配って回る。

そっか、テレビなどでは見たことあるけど、大きな客船の出港のときは、ホントにテーブルを投げるんだ（図8）。動き回り詰めのイキナリでくたびれたけど、面白い体験だった。



図8 風に舞う色とりどりの紙テープ

そして、まず最初の公式イベントとして、メインホールのパシフィックホールでオリエンテーションである。乗船者は、ツアー参加者500人＋クルー130人超で、総勢600人を大きく超えるものらしい。日本旅行の総合案内やふじ丸の乗船案内に続いて、日食観測アカデミック・ツーリズム・プログラムの開校式が行われた（図9）。今回のツアーは、正式には、兵庫県立大学公開講座の一環なのだ。



図 9 海部さんや森本おぢさんたちゲストとスタッフ一同

そして 17:30 からは、ダイニングルームの「ふじ」でウェルカムパーティ。ネットなどで紹介があったとおりに、ふじ丸の料理はたしかに美味しい。種類も多くて、とてもすべてを味わい尽くせなかった。

十二分にディナーを満喫した後に、部屋に戻って一休みしてから、20:00 からが、最初にイベントで、世界天文年の日本委員会委員長、元国立天文台長の海部宣男さんによるミニ講演である。

世界天文年の簡単な紹介の後に、お題は、星座と七夕のお話であった。写真も撮影したのだが、パシフィックホールが大きすぎて演台からの距離が遠く、残念ながらちゃんと写っていなかった。

昔の旧暦の七夕（8月）は、必ず、上弦の月だった。というのも、七夕はそもそも七日目の夕方なわけだ。だから、半月が沈むと真夏の星空と天の川がみえる。つまり、月と星と天の川を楽しめたのが旧暦の七夕だったんだ。

旧暦のことなどは知っていたが、七夕の詳しい話までは、恥ずかしいことにぼくも知らなかった。いやいや、さすがに海部さんである。

ちょっとメンバーで一杯ひっかけているうちに、つぎのイベントタイムの 21:30 になる。なかなか忙しい。

各種イベントはタイプの違うものが平行で複数組んであって、ピアノ演奏の福田さんには申し訳なかったけど、森本おぢさんの出演するサイエンストークの方に参加する（図 10）。いつも相も変わらず、の森本トークであった。



図 10 「シアター」で行われた第 1 回サイエンストーク

森本さんに続いて、明珍宗理さんが、自身で製作されている、澄み切った音色のする火箸の話がされた。5代前までは「ミョウチン」と言えば、甲冑を作っていた家系らしい。伝統的な技を残すために、刀匠にのみ供給する玉鋼で火箸を作ることを考えたそうだ。

たしかに、玉鋼で製作した火箸や風鈴は、とても高音ながらも耳に痛くない柔らかい何ともいえない音色がした。余韻も奥深く残る素晴らしい音色だった。

また、チタンで鍛造した、ぐい飲み、も紹介された。これまたさまざまな音色で残響がずっと残る、心にも残るデモンストレーションだった。

今日は少し飲み足りなかったし、小腹がすいた人のために夜食の用意もあったが、トー

クの終わった 23:00 前には体力の限界に達して、いまからバーで呑むというおぢさんの誘いをなくなく振り切って、部屋に戻った。おぢさんたち、元気だなあ……。

など書いていると紙数がいくらあっても足りないので、皆既日食当日へ進もう。

3.2 7月22日(水) クルーズ第3日目 ＜皆既日食当日＞

皆既の朝、みな興奮して早く目覚める。この2日間の曇天で風が強かった天気が、一転、風は凜々晴天となった(図11)。空は青く、海はもっと青い。すっごく睡眠不足だが、疲れも吹き飛びそうで、ふだんならとうてい食べられないはずの朝食も、つつい食べ過ぎてしまう。



図11 7時過ぎの海景色

そして、8:30に参加者全員がパシフィックホールに集結して、日食観測の準備にかかる(図12)。黒田さんが登場すると、今日の快晴を祝して、全員が拍手喝采である。そして、諸注意の後、スタッフに誘導されて、さまざまな観測場所へ全員が行儀よく移動する。

ぼくたちはもっとも広くて200人ほどが展開できる6階船尾のスポーツデッキへ。みな譲り合いながら十分なスペースを取って、9時過ぎには観測場所を確保して一段落した(図13)。



図12 観測スペースごとに集まったパシフィックホール



図13 観測準備中のスポーツデッキ; 9時ごろだが日差しは強烈

これから、部分食が始まる第一接触まで約1時間、6分間ほど続く皆既日食まで約2時間半、晴れた代わりに猛烈な暑さの中、かなりの長丁場だが体力がもつかなあ。

おおまかなタイムテーブルとしては、ふじ丸の観測地点である、

北緯 25 度 18 分

東経 142 度 01 分

においては、

- ・第一接触 (部分食の開始) 10:00 ごろ
- ・第二接触 (皆既食の開始) 11:26 ごろ
- ・第三接触 (皆既食の終了) 11:33 ごろ
- ・第四接触 (部分食の終了) 12:55 ごろ

の予定である。観測中に時刻などの読み上げはあったのだが、ちゃんと記録するのは忘れてしまった。皆既の継続時間は、

6分39秒

程度だったはずである。

しかし、スポーツドリンクで水分を補給したり、ときどき1階下の自室に戻って休憩したりしているうちに、汗びっしょりの中、いつの間にか第一接触の時間になった。

そして部分食が進むにつれ、次第に欠けていく太陽は肉眼のちら見でさえわかる（危ないから勧めないが、食分が0.5ぐらいまで進んだとき、一瞬だけ太陽を目にしたら形がはっきりわかった）。

さらに、三日月ぐらいまで細くなると、気温の低下も体で感じられる。そして皆既日食の始まる第二接触の数分前には、船尾方向から皆既日食帯の暗さがわかりはじめる。ここは少し説明が必要だろう。

今回の皆既日食では、小笠原諸島近海では皆既日食はおおざっぱに北西から南東に向けて移動する（図14）。そしてふじ丸も、少しでも皆既日食時間を延ばすために、皆既日食帯のほぼ中心線に沿って、皆既日食の進行方向である東南方向へ航行している。ただし、皆既日食の進むスピードの方が船の航行速度よりはるかに速いので、皆既日食の領域は船尾側から船に追いつくことになるのだ。

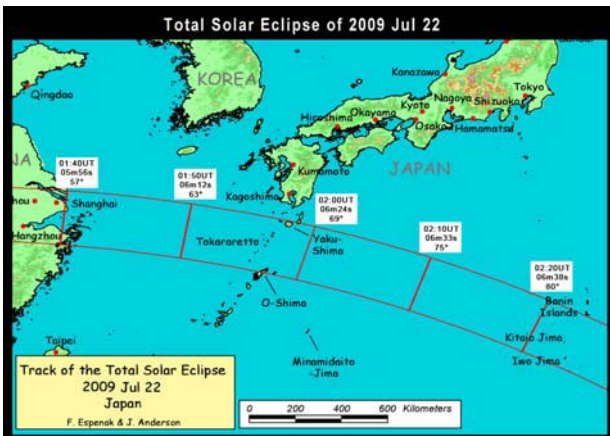


図14 皆既日食帯（画像提供：NASA）

そして、スポーツデッキは船尾にあるため、船尾方向から暗い領域が近づくのがはっきりわかるのだ。すなわち、皆既日食の少し前ぐらいになると、船首方向はまだふつうの空の色と明るさなのに、船尾方向は青黒い色に染まっていくのである（図15、図16）。



図15 皆既日食開始数分前の太陽と青くない空

周囲の空が暗いのがはっきりわかる。



図16 後日（8/4）に撮影した太陽と青空

いよいよ、お待ちかねの皆既日食タイム！金星や水星が見え始める中、ついに黒い太陽がその姿を露わにした。何というか、まさに筆舌に尽くしがたいとはこのことだろう。五十余年生きてきて、いろいろな経験をしたが、その中でも一、二位を競う素晴らしいセン

ス・オブ・ワンダー体験だった。

まずは、皆既日食中にだけ肉眼でもみえる太陽コロナ（図 17）。予想外だったのは、太陽を取り巻くコロナが意外に明るいことだった。満月ぐらいとは聞いていたものの、実際にはもっと明るい気がした。



図 17 黒い太陽とコロナ（11:23:44 ごろ）

これは露光調節が可能な一眼レフで撮影したもの（撮影：福江 慧）。解像度を高くすると保存に少し時間がかかるので解像度は低くしてあるが、その点がデジタルカメラの欠点かもしれない。

コロナをしっかり見たければ、直前の 10 分程度は、アイマスクなどをして暗順応しておいた方がいいと聞いていたが、いろいろ撮影しているうちに皆既になってしまった。しかし、十分に最初からコロナは見えるぐらい明るかった。双眼鏡で見たコロナも絶品で、コロナルストリーマーがはっきりとわかった。

また、皆既日食の直前と直後に一瞬だけ現れるダイヤモンドリング（図 18）。これは予想外の衝撃だった。とくにダイヤモンドリングの出現を動的に肉眼で追いかける感動は、写真からは決してわからなかった（わかっていた）。コロナももちろん綺麗だったが、それ以上に、ダイヤモンドリングは超絶的に綺麗だった。



図 18 直前のダイヤモンドリング（11:23:20 ごろ）

ここらへんは秒単位で変化が起こっている。

そして、マイ極めつけは全天周ランドスケープ（図 19、図 20、図 21）。これも話には聞いていたが、おそらく写真も見たことあるだろうが、頭上に黒い太陽と星空が広がる中、360 度全方位を取り巻く水平線がすべて、まるで夕焼けのように赤くなっているのである。そこには地上（海上）の景色とは思えないような、とても奇妙な風景が広がっている。まるで異世界に放り込まれたような感じだった。



図 19 赤い水平線（11:30 ごろ）

写真以上に異様な風景だった。

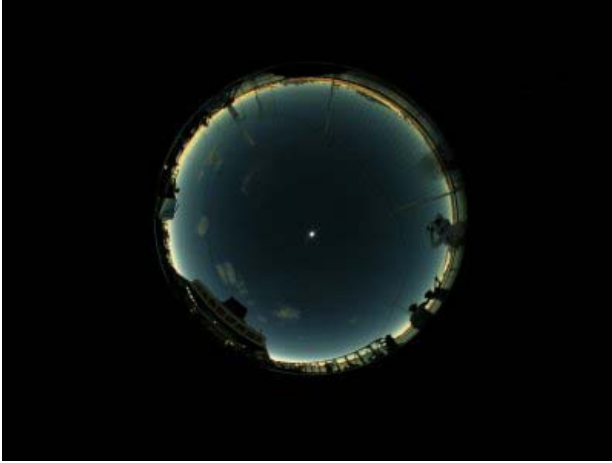


図 20 魚眼レンズで撮像した全天 (11:25:38 ごろ)

われわれのグループでのベスト・オブ・ベスト。



図 20 部分食中の全天 (11:13:06 ごろ)

わっはっは、ここで告白しておかなければならないが、あまりに興奮してしまい、その赤い水平線をぐるりと撮影したはずのビデオ、ボタンを押し間違えたのか写っていなかった (爆泣)。皆既が終わった後に、何だか変だとビデオをチェックして、あれえ〜と、しばし呆然となってしまった。まあ、自分の目にはしっかり焼き付けたのでいいか。

後日振り返っての反省としては、映像的には皆既日食自体のビデオ画像は使えなかった。というのも、ふつうのデジカメと同様に、用意していたホームビデオでは、露出を自動で調節するので、コロナの光がにじんでしまう

ためだ。ズームアップすると中央に黒い部分がわかるが、黒い太陽とコロナがきちんと写らない。露出時間の設定ができる一眼レフタイプのデジカメや、同様な機能をもったビデオが必要である。…というような初歩的な準備不足であった。ただ、音声的には、“赤い水平線がみえます”とか、“向こうには敵船がみえます”とか、スポーツデッキの大騒ぎなど、実況中継していたのが残ってなくて残念である。

皆既日食が終わると、まだ部分食は続くが、次第に日差しと暑さが戻る中、参加者はつぎつぎと撤収していく。ちょうどランチタイムとなって、今回の大成功を祝って、あちこちのテーブルで乾杯の声が上がっていた。冷やしそうめんなどの和食風だが、一口フィレカツがとても柔らかくて美味しかった。

いまこの行を打っているのは、皆既日食終了から 2 時間と少し経った時点である。すでに青空が戻り、見渡す限り青い海が広がる中、日本国内や他の地点での観測がどうだったのか不明だし、そもそも日本がどうなっているのか存在しているのかさえ不明だ。一つの村に匹敵する 600 人以上の人々を乗せたまま、興奮醒めやらぬふじ丸は、日本へ向けて舵を切った。

午後のアフタヌーンティーの後、第一接触 (部分食の開始) から第四接触 (部分食の終了) まで 4 時間近く、スポーツデッキで撮影を頑張った同行者たちが午睡を取っている間に、撮影した全部のデータを集約整理したり、またそれらの中からぼくたちのパーティのベストショットを選んでみた (図 17 から図 20)。残念ながら、ぼく自身が撮影したショットは入っていない (泣)。

そして、ディナータイム (図 22) の後には、初日同様、またまた黒田本舗の開店である。ただ、この夜は、パシフィックホールで、「(自

分はこんな写真を撮りました)フリートーク」大会なので、お客さんはさすがに出足が鈍い。



図 22 和食のフルコース

ふじ丸はメニューもよく工夫してあって、クルーズ半ばで胃がくたびれる今日あたりに、昼も夜もさっぱりした和食がセットされている。

それでも、姫路の「ひなの」ちゃんのお手伝いもあって、そこそこの売れ行きであった。

この2晩ほど4、5時間しか寝ていないので、さすがにこの日はベッドに入ったとたんに爆睡だった。

クルーズ後半には小笠原父島へ上陸し、VERA 小笠原局などの見学もしたが、そこらへんはホームページ[1]をみていただくことにしよう。

4日目に即席で作成した皆既日食の経過を図23に示しておく。部分食の部分は約10分おきの画像で、皆既食前後のダイヤモンドリングは数秒ごとの間隔である。クルーズ最終日に「サイエンストーク」という企画で宇宙の話をしたのだが、その前座的に、この経過をアニメにしたものをみせたら、そこが一番ウケた(笑)。

なお、念のために書いておくが、部分食ではフィルター装着の撮影で、皆既食はフィルターなしの撮影である。というのも、皆既日食から戻って後、別件で取材を受けたときに

この写真をみせたら、実際に目でこんな風に見えると思った記者さんがいたので。

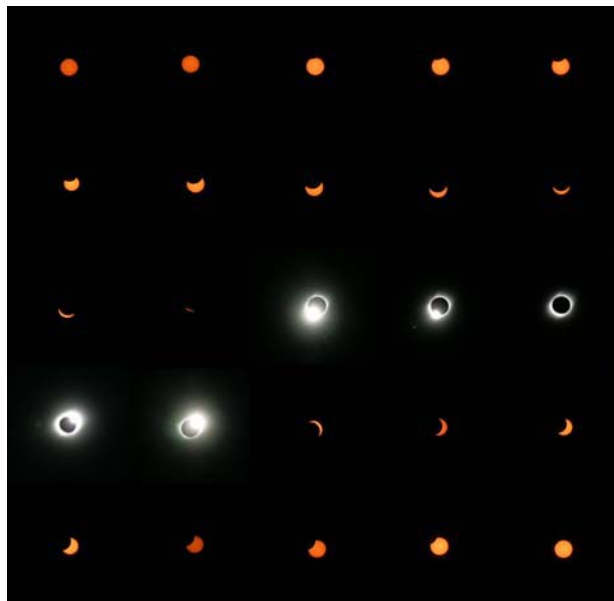


図 23 皆既日食の経過

4. ピンホール像の実験

第一接触(部分食の始まり)から第四接触(部分食の終わり)まで、およそ10分おきぐらいに、“TOTAL SOLAR ECLIPSE”と孔を空けた「かず茶」作のボードを使い、ピンホール像を撮影した。ほんとはそれらを全部並べてピンホール像の変化をみてもらいたところだが、図だけで2ページ半になってしまう。最初の原稿を読んだ編集長からの指示で3枚だけ(図24)紹介するので、その他の画像やフルサイズはホームページ[1]をみていただきたい。

このピンホール像はとても目立ったようで、気がついた近辺の参加者たちが写真を撮りに来ていた。

またピンホール像については、もう一つ面白い実験をした。円形や星形など形の違う穴を開けたボードを使うと、投影面にボードが近いときには穴の形がそのまま見えるが、投影面からボードを離すとピンホール像になって、どれも同じ欠けた太陽の形になってしまうのだ(図25)。

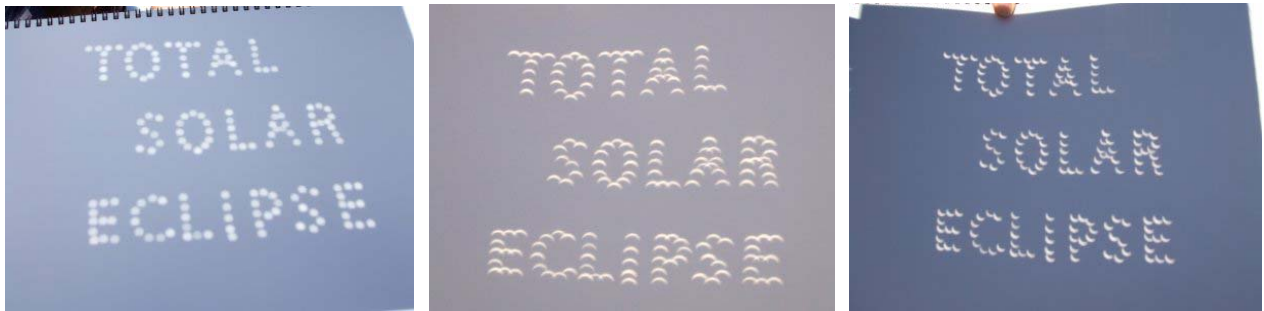


図 24 ピンホール像（左：10:17 ごろ、中：11:26 ごろ、右：11:40 ごろ）

左：そろそろ部分食は起こっているはずだが。

中：皆既日食に入る第二接触の直前；太陽はかなり細くなっている。

右：皆既日食の終わる第三接触の少し後；反対側が欠けているのがよくわかる。

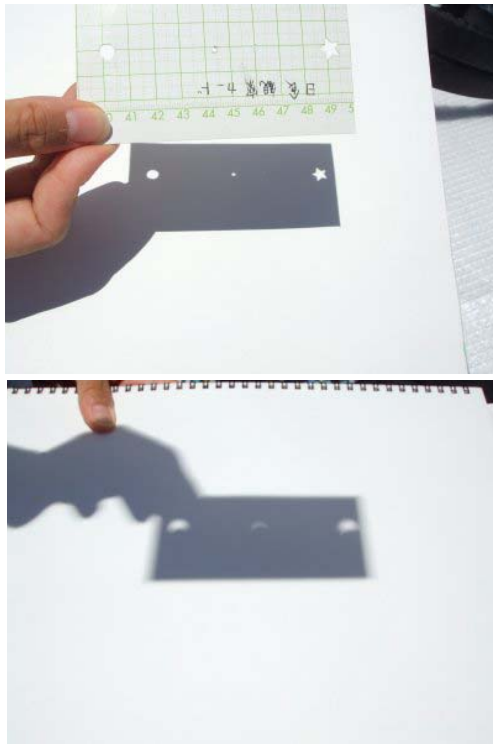


図 25 形の違う穴も、ピンホール像は同じ形になる

5. 後始末

例によって、大きなイベントの後は、後始末が大変であった。

・ホームページの作成：事前準備などはクルーズ前から書き始めていて、クルーズ中もずっとリアルタイムで書き進めたが、写真などを貼ると大幅に書き足す必要もある。もちろん

ンデジカメデータの整理やビデオデータの保存なども必要。

・紀行文：クルーズ直前に『数学セミナー』誌から日食紀行文を頼まれていて、クルーズ中に仕上げ、帰宅翌日に送稿した。

・皆既日食報告：皆既日食があまりに衝撃的だったので、『数学セミナー』誌以外にも、『天文月報』誌と『天文教育』誌には、皆既日食の報告記事を書くことにした。…また余計な仕事を増やしてしまった。

そして、山のように溜まっていた事務仕事……。

幸いにして、そこそこの写真も得られたので、とりあえず、この夏に予定されているさまざまな行事：

- ・堺市認定講習（7/30 終了）
- ・地学野外実習（7/31 終了）
- ・ひらめき☆ときめきサイエンス講座（8/4 終了）
- ・天文教育普及研究会年会（8/9 終了）
- ・免許更新講習（8/28 予定）
- ・SPP 授業（9/3 予定）

などでは、毎回、日食ネタが出せるなあ。にしても、なんと行事の多いこと（泣）。

なお、皆既日食翌日に、写真をトリミングして粗いアニメは作ったが、帰京後、同じパ

一ティメンバーが、より精度のいいトリミングしてくれたので、アニメーションはもう少し綺麗になった。それらもホームページ[1]を参照して欲しい。

6. 皆既日食へ行こう

とまあ、いろいろと羨ましそうな話を書き綴ったが、しかし、皆既日食だけは、実際に体験しないと、どういう意味があるのかわからないと思う。ぼく自身がそうだったから。だから、チャンスがあれば、是非、皆既日食ツアー（+α）に行くことを勧める。

だいたい、ぼく自身がとくに日食フリークだったわけではなく、もともとはクルーズ目当てで皆既日食は見ればめっけものつもりだった。そして、期待以上にふじ丸のクルーズは素晴らしくて、予想通りに「クルーズ病」には罹ってしまった。帰ってからも即座に、ふじ丸のつぎのクルーズ予定や、飛鳥IIで世界一周のクルーズをしたらどれくらいかかるとか（約100日で、400万程度）調べたりして、貯金を全部はたけば行けそうだけど、100日も休んだらクビになるなあ、とか思ったりしたものだ。

一方、初日のオリエンテーションで、黒田さんが、「みなさん、きっと日食病に罹りますヨ。これはお医者さんでも治せないの、船の医務室にいても無駄です…」などと、参加者を笑わせていて、ぼくもワハハと笑い流していたのだ。職業柄、太陽の画像なんて飽きるほどみているし、最近ではひので衛星の詳細なムービーを講義でみせたりもしていて、まさか、「日食病」などと思っていたわけだ。

しかし、自分の目でみた“黒い太陽”は、まったく違うものだった。ものの見事に「日食病」に罹ってしまったのである。

美味しそうな料理の写真をみることと、実際に美味しい料理を食べることとは、まったく違う。

皆既日食の写真はたしかに綺麗だが、あくまでも綺麗な写真でしかない。やはり本物はまったく違うということだ。ダイヤモンドリングが変化するときの光の躍動や、赤い水平線の不思議な色彩は、実際に見ないことにはわからないと思う。自分たちを取り巻く自然界のセンス・オブ・ワンダーは、やはり自分自身の五感で捉えるのが一番大事である。ほんと、何とかチャンスをみつけて、ぜひ皆既日食を体験してみたい。おそらく人生観が大きく変わるだろう。

すでに現実世界に戻って、雑用書類の山に埋もれているけど、以前とは世界の見方が変わってしまっていることもわかる。自分の世界がとてもちっぽけなものだったと思うし、世事にあれこれと悩むのがあほらしくなって、多少のことはどうでもいい気になってきた。

つぎに日本で皆既日食が見られるのは2035年9月2日、26年後である。80歳かあ、少しやばいなあ、まだ何とか生きていかなあ。クルーズ船は出るかなあ。などと、先のことを調べながら、2012年11月13日のオーストラリアを、一度は見ておきたかった南天の星空と併せて、いまは本気で考えている。

文 献

- [1] <http://quasar.cc.osaka-kyoiku.ac.jp/~fukue/>